

キャンプに対する高齢参加者の意識

－ キャンプ参加高齢者の不安を中心として －

○中島一郎（国際武道大学）

篠田基行（国際武道大学）

キーワード：高齢者，キャンプ，意識，不安

はじめに

国際連合では「高齢者」を65歳以上、その国の総人口に占める高齢者人口の割合が7%を越える社会を「高齢化社会」と定義している。わが国は、高齢者人口が総人口の12.0%を占め、2025年には26.55%（3.76人に一人）に達し世界一の水準に達するという予測報告も出されているように、歴史上かつて経験したことのない超高齢化社会へと向かってあらゆる領域・分野での対応が必要とされている。

一方、こうした高齢者対策の一貫としてのレクリエーション領域からのアプローチが各方面において試みられているが、特にキャンプに焦点を当てた報告例は極めて少ないのが現状である。幼・青少年を中心としたキャンプ効果が科学的にも数多く立証されつつあるだけに、高齢者に焦点を当てたキャンプについても今後更に検討してゆく必要があり、高齢者問題の観点からも非常に意味があると思われる。

そこで本研究では、高齢者がキャンプに対してどのような意識を持っているのかを特にキャンプ参加への不安を中心として分析することにより、高齢者を対象としたキャンプを今後実施してゆく上での基礎資料を得ることを目的とする。

方法

- 1) 対象：千葉老人大学健康指導教室参加者 80名（男：38名，女：42名）
※統計上、参加者を60～64歳群（26名：32.5%）、65～69歳群（38名：47.5%）、70歳以上群（16名：20.1%）に分類した。
- 2) 期日：平成2年8月9日（木）～10日（金） 1泊2日
- 3) 場所：千葉県立海上キャンプ場（千葉県海上郡海上町岩井）
- 4) キャンプ概要：スタッフは健康指導教室スタッフを中心に構成され、参加者は男女混合の7～15名の計10班で構成された。キャンプは、野外炊事・テント泊を中心とする原始的キャンプ（Primitive Camp）の形式で行なわれ、主なプログラムは、ゲーム、フォーク・ダンス、レク・ダンス、キャンプ・ファイヤー（キャンドル・サービスを含む）等であった。
- 5) 調査方法：オリエンテーション時に、アンケート形式による質問紙法を実施
- 6) 調査項目：性別、年齢、過去のキャンプ経験、キャンプへの興味度、キャンプ参加への積極度、キャンプ参加への不安度、不安の具体的内容（身体面、精神面、生活面、人間関係面、その他）
※「不安の具体的内容」のみ記述式で回答を求め、他の項目は選択肢で回答を求めた。
- 7) 分析方法：第一次集計→各設問の単純集計を整数及びパーセントで算出
第二次集計→各設問間のクロス集計を整数及びパーセントで算出

結果

1) キャンプ経験

全体では、「生まれて初めての経験」(43名:53.8%)が過半数を占め、次いで「ずっと以前に何度か経験」(25名:31.3%)、「最近10年以内に経験」(12名:15.0%)の順となっていた。男女別では、「生まれて初めての経験」の割合が女性では2/3強を占め、男性の2倍近くを占めていることが特徴となっている。年齢別では、何らかのキャンプ経験のある者の割合が70歳以上群で他とは逆に過半数を占めていることが目を引いた。

2) キャンプに対する興味度

全体では、興味派(「おおいに興味あり」+「興味のある方」)が56名(70.1%)と大きな割合を占めたのに対し、興味無派(「まったく興味なし」+「興味のない方」)は11名(13.8%)であった。男女別では、男性の興味無派の割合が女性を大きく上回っていることが特徴となっている。年齢別では、年齢が上がるに連れて興味派の割合が大きくなっていることが目を引いた。

3) キャンプ参加への積極度

全体では、積極派(「おおいに積極的」+「積極的な方」)が46名(57.5%)と過半数を占めたのに対し、消極派(「まったく消極的」+「消極的な方」)は16名(20.0%)であった。年齢別では、70歳以上群の積極派の割合が1/3強とかなり低い値になっていることが目を引いた。

4) キャンプ参加への不安度

全体では、不安派(「おおいに不安」+「不安な方」)の24名(30.1%)に対し、不安無派(「まったく不安なし」+「不安ではない方」)が43名(53.8%)と過半数を占めた。男女別では、女性の方が全体的に不安度が高い傾向にあることが特徴となっている。年齢別では、70歳以上群で不安無派の割合が過半数をかなり下回ったことが目を引いた。

5) 不安の具体的内容

身体面では、血圧障害や眼病、腰痛などの既往症状からくる不安が主流となっており、体力や傷害についての不安は一つもあげられていなかった(20名:25.0%)。

精神面では、ただ漠然としたキャンプへの不安があげられていた(3名:3.8%)。

生活面では、環境の変化やテント泊による寝不足への不安や、カロリーや味付け、好き嫌いなどの食事に関する不安が主流となっていた(20名:25.0%)。

人間関係面では、社交性のなさや人間関係が苦手などの自分自身に起因する不安が主流となっていたが、老人には変わり者が多いから心配だという他者に起因する不安もあげられていた(10名:12.5%)。

その他の不安では、暑さや害虫、救急施設面での不安があげられていた(6名:7.5%)。

まとめ

本報告で対象とした高齢者は、老人大学健康指導教室への入学が認められたという時点で既にある程度以上の健康を有しているということが前提となっており、これはキャンプ参加条件の重要な要素ともなっている。その意味でキャンプは、多様な状態にある高齢者の中の限られた層に対してのものという限定を受けている。また今回のキャンプでは、事前にある程度の人間関係ができていう前提条件も含まれている。その故今回得られた結果については、これらの前提条件を踏まえた上で検討してゆく必要があり、キャンプ経験による高齢者への効果を含めた総合的な研究に今後発展させてゆくつもりである。